

図書館だより

LIBRARY NEWS

2004年
秋号
(通巻73号)

《2004.9.20発行》

東海学園大学
名古屋キャンパス図書館
三好キャンパス図書館

〒468-8514 名古屋市天白区中平2-901
TEL(052)801-1528 FAX(052)804-1192
〒470-0207 西加茂郡三好町福谷西ノ洞21-233
TEL(0561)36-6755 FAX(0561)36-6759
<http://www.tokaigakuen-c.ac.jp/jinbun/library/lib.html>

集落を
行く鬼と
若衆



青鬼



民家より
出てきた
鬼



神社に
鎮まる
前の鬼達



特集 伝統芸能 2

鬼は日本のサンタクロース??

春日井 真英 (人文学部 日本の民俗 仏教文化担当)

.....
豊橋近郷の集落に全く偶然に入った。それは集落の周辺に祭礼が行われているという幟に眼をつけてのことだった。細い築地に囲まれた道をにぎやかな声をたよりに進む。ある角を曲がったとたん、

「ウラ~~~~!!」

と言う奇声とともに、赤鬼と上下(かみしも)をつけた若者とそれを守る様に法被姿の4, 5人の青年、その後から小学生ぐらいの子供達が男の子も、女の子も走り抜ける。走り抜けた反対側から同じように青鬼とその一団が現れ、互いにブツカリアイ、揉みあい、氣勢を上げ飴をぶちまけていく。その飴を求めて子供達はもとより、その近辺にいるお婆さん達まで群がってくる。これが初めて豊橋、豊川近辺で鬼祭りに出会った最初の風景である。鬼が逃げる、それを護る様に上下をした若者が付き、更にその二人を護る様に法被の若衆が駆ける。逃げている様に見えるけれども、厳密には、鬼は集落内の各家を大急ぎで訪問しているのであった。各家には、先に法被姿の若者が訪れ、どこから侵入すれば良いかを確認、鬼を導いていく。鬼達の一団は家の庭先から奇声を上げながら、縁側とか玄関口から家の中に侵入していく。家の人たちは中で鬼を迎えたり、玄関先まで出てきたり様々だが、鬼は居間で四股を踏む様に暴れ、その際に躰から飴などをばらまき、供の者達も鬼に合わせる様に飴をばらまいて、スクラムを組み、風のように激しく走り去ってしまう。家の人たちは鬼が訪れた痕跡としての飴を家族総出で寄せ集め、拾い集めている。もちろん鬼達は、道端で待機している老人達にも優

しく話しかけたり、子供達の手にしている袋の中に飴を落としていくことも忘れない。鬼に付いている青年団員達はスッピンだが、鬼は本来誰だか判らない様に努めているという。そして、鬼と青年達は何軒かの家を廻ると、一休みと称してあらかじめ設定されているお宅(宿)で息を整えるのであるが、ここではしっかりもてなされお酒が入り、鬼だけでなく、お供の者達も走っては呑み、呑んでは走っているから...、そりゃ大変なことになる。鬼の交代もコソソリと行われているみたいである。適当に交代しながら鬼達は集落の中の家一軒、一軒を訪問しおみやげの様にまき散らかす飴は、一見すると光を反射させて金銀財宝がきらびやかに鬼によってまき散らかされている様に見える。地

域によって鬼の播くものは違うが集落の人たちにとって、それらは異界から顕れ出で来たモノがもたらした宝物なのである。だからこそ、子供達は鬼にまわりつく様に「ください」「下さい」と両の手を合わせる様をお願いし、鬼は時には素直に、時には無視して駆け抜けていくのである。この日、鬼はお宮の中に身を隠し、来年まで鎮まるといふ。鬼のもたらした宝を象徴するかの様に宮前では餅投げが盛大に行われていく。そう、子供達は一人ポリ袋3~4の飴を鬼からせしめ、楽しげに笑っているのがとても印象的であった。

豊橋の安久美新明社で2月11日に行われる鬼祭も、町中を駆け回り、神社に戻るが、その間タンキリ飴が街を白くしていく。

イワクラ考

瀬瀬 麻梨香 (人文学部1年)

私の住む岐阜県恵那郡山岡町には、イワクラがある。イワクラについて名前しか知らなかった私にとって今回調べたことはとても勉強になった。イワクラは“磐座”と書き、神が降臨されたとされる神座のことである。町内のイワクラの森と呼ばれる場所には、大目玉石、ストーンシート(神の座と言ひ、宮司や新宮の座る場所を言う)、祭壇石(拝殿または神物を捧げる台)石舞台(巫女が舞う場所、舞殿に相当する場所)、メンヒル(2本以上の立石)、ドルメン(2本の石柱の上に岩がのっているもの)、などがありその中に磐座もある。特に“雨乞いの岩”と呼ばれる磐座は古来より雨乞いの祭祀が行われた場所である。その岩は立方体で切り口が人工のように見え、まるで水を溜めるために取り取ったような水受けの形になっている。水は常に500㍻くらい溜まっている。岩は浮いた状態であるにもかかわらず、水が少しずつ湧いていると聞き、不思議でたまらない。またこの水を除去すると、大雨などの災害も起こるといふ。私の住む山岡町の磐座は磐座の周りに祭壇石などのさまざまな岩も見つかっている。これはなぜなのかと調べると、神の降臨した神座(岩だけでなく木も)を中心に、一定域が神庭として注連縄しめなわなどで聖別されるその場所が古形の祭場であったということが分かった。つまり、磐座の周りにある岩達は

古代の人々が祭りを行った跡が現在も残っているということなのだ。神は本来気まぐれで毎年、違う岩や木に降臨するため、注連縄が張られた磐座が増えるため、日本各地にこのような場所があるわけだが、自分の住む町にその一つがあることが不思議であり、うれしく思う。最初にも書いたように、磐座について詳しく知らなかった私にとって、今回調べたことはとても勉強になり、私自身が自分の住む町の一部について知ることが出来て、本当に良かったと思う。



桑名・石取祭り

湯の花神事

伊藤 久未 (人文学部1年)

毎年10月第2日曜日に愛知県丹羽郡大口町秋田地区の天神社で湯の花神事が行われる。

湯の花神事とは、秋の豊年祭の事で、拝殿の東側に湯釜を作りその湯釜で立てた湯を氏神様に祭る神事である。この地方では湯釜に湯を立てる神事を「おいだて」と呼ばれている。

その湯を参詣人に振り掛ける楔の一種だが大口町は趣が異なる。

神事が行われる一週間前に、役員によって湯釜を拝殿の東側に作り、お湯立ての当番をふあげの神事によって決める。ふあげの神事とは地区全戸の名を小さい紙に書きこれを三宝にのせその上を「こへいぞ」でなでてくっついてきた紙で決める事である。又湯釜で使われるふたやしめ縄を作るのも、すべて手作業で行われる。

神事の当日、一年まめに暮らせるようにと今年とれた豆木とわらで焚付けた湯と山海の珍味を神前に供え地元の小学生の女の子によって神楽を奉納する。

神事が終わると氏神様に供えた湯を湯釜に戻して、神主がまず湯を飲み続いて氏子、参拝客も飲み無病息災を願う。

この神事は大口町の文化財に登録された。

神事は尾張地方で昔は多く行われていたが今は昔どおり行われているところの数が少なくなっている。

だが昔から今に伝える大切な伝統は大きな価値があるのではないだろうか。

今回地域の民俗を調べた事によって自分の町にこんないい神事がある事を知るいい機会となった。これからもさらに詳しく調べるとともに他の事も調べてみたいと思う。

上げ馬神事

高森 亜弓 (人文学部1年)

私の現在の住まいは愛知県だが以前暮らしていた三重県多度町の有名な行事の「上げ馬神事」を調べた。上げ馬神事は多度町にある多度大社で行われている。この行事は700年前から続いている。目的は1年間の農作物の作柄を占う祭りである。もちろんこの祭りの主役は馬である。6頭の馬に、選ばれた10代の男性が乗り2回行われる。今年は6回成功した。これは例年より多いらしい。

今年は10万人も的人がこの上げ馬神事を見に行った。私もその中の一人である。これで私は人生で3回見に行ったことになる。小さい頃はこの祭りの意味もわからなくただ馬の大きさにビックリし、人の多さにビックリし、特に良い思い出は残ってなかった。しかし今回、見に行つてこの祭りの意味と私と同じ世代の人が馬に乗り、駆け上がる姿に感動した。毎年見に行くことはできないかもしれないけど機会があればまた行きたい。そしてこの行事がもっと長く続いていってほしい。

谷汲踊り

上野 宏美 (人文学部1年)

岐阜県揖斐郡谷汲村に谷汲踊りと呼ばれる踊りがある。今より800余年前より伝わる武者踊りで、源氏が平家を倒した後、鎌倉へ戻り戦勝を祝い踊ったのが始まりとされている。この頃は谷汲踊りとは呼ばず、鎌倉踊りと呼ばれていた。その後、農民が雨乞いのための神楽として踊ったことにより雨乞踊りと称されるなど、時代の変遷と共に名称も変化していった。そして近代40年間も衰退していたので、昭和29年1月に復興を図るためにこの踊りを「谷汲踊り」と命名して行うようになった。

この踊りは鳳凰の羽根を形取った竹製の長さ4メートルの「シナイ」を背負い、胸に直径70センチの太鼓を抱えた12人1組で踊る。他に鉦鼓、洞具、横笛、拍子木、唄・お囃子が一緒になって踊る。踊りは、道行き・車切り・馬車・拍子・倉間・ひねり等の順序種別があり、毎年2月18日に豊作祈願のために村内3ヶ所で上演される。また、春のさくらまつりや秋のもみじまつりの時にもこの谷汲踊りは上演されている。

昭和33年岐阜県重要無形民俗文化財第1号の指定を受け、岐阜県を代表する郷土芸能の一つとして数えられている。



大海の放下 (盆行事)

川島町川祭り

上野 宏美 (人文学部1年)

私の住んでいる町の近くに、木曾川の中洲に位置する川島町という町がある。川島町には川祭りという祭りがあり、江戸時代後期から始まったとされている。幾度となく洪水に悩まされてきた村人が「五穀豊穰」「水難防止」を水神様に祈願したことが祭りのルーツとされている。

当初は1艘の「舟やま」で行われていたが、明治2年から2艘で行われるようになる。この頃から2つに分けた組が互いに競い合っていく祭りの形態ができあがった。「舟やま」を繰り出す祭礼は提灯祭りとして有名な愛知県津島神社の天王祭が伝承されたものである。かつては、木曾川流域の村々でも行われていたことから、舟運業に携わった舟頭等に伝えたのではとされている。

しかし、昭和38年を最後に祭りは途絶えてしまう。理由は高度成長期に入って大きく変わり、大掛かりな祭りを地域で支えきれなくなったこと。そして地域に色濃く残された船頭文化が失われてきたことによる。

だが、37年後の平成12年に川祭り愛好家等によって、祭りは河川環境楽園で再び行うようになった。

諏訪例大祭

石井 香菜江 (人文学部1年)

私の住んでいる所には毎年4月の第1土日に、「諏訪例大祭」というお祭りがあります。このお祭りは美濃加茂市と八百津と川辺町の一部の部落が参加するお祭りです。これは江戸時代から400年続いているといわれています。五穀豊穰を願い、獅子が舞い暴れ、天狗がそれを諷めるなどしながら拝殿の周りを回ります。獅子に頭をかまれると病気をせず元気に育つと言われており、私もかまれました。

他にも南と北に分かれて小学生以下の男の子を乗せた山車を神社まで男性が引っ張りどちらが早く辿り着くか競い合います。山車の上では男の子達が笛や太鼓などの楽器で応援しています。私も上に乗って楽器を演奏したいと思っていましたが、女の子は乗れないので残念です。

坂下神社の花馬祭り

樫坂 昭大 (人文学部1年)

坂下神社の花馬祭りは、もう800年間ずっと住民に伝承されてきた伝統行事です。この神社の創建年代は不明ですが、かなり古く、元は神洞の豪族林小次郎永正が勧請し、下組宇法力屋の地内にあったものを、木曾義仲が現在地に遷座したと伝えられています。

花馬祭りは当初、戦勝祝いの祭りでしたが、いつの頃からか農民の祭りに発展し、今日のような町を挙げての祭りとなっています。馬に付ける幣も花串になり、1頭の馬に付ける本数も変わってきました。今は年間の365日にならい、その本数を飾り付け、年間365日の五穀豊穰・万民平安を祈るようになっています。花馬を先導する囃子方は、1馬に笛2人、太鼓2人、鼓2人で、太鼓を別の童子が背負います。

祭りは町組・下組・合郷の3区から1頭ずつの馬が華麗な花串を背に、笛・太鼓・鼓の囃子方を先導に稚児に引かれて駅前には集結、その後、3頭の花馬は哀愁を帯びた祭り囃子の中を行列を整えて坂下神社に向かいます。



名古屋みなと祭り

塚崎 ひとみ (人文学部1年)

私の住んでいる名古屋市の祭りというと、名古屋みなと祭りが思い浮かぶ。このみなと祭りは昭和21年から、伝統というには少し浅いものを感じるけれど、この祭りの発端は、先の第二次世界大戦で一面焼け野原となった名古屋の復興を願ったものだといわれている。このことから、今の名古屋の象徴ともいべき祭なのではないかと思っている。

毎年7月に名古屋港近辺で開かれ、長さ2kmにも及ぶ大パレードが行われる。子どもみこしから子ども獅子、神楽隊、音楽隊と続き、その参加人数は1,600人にもなる。また、市の無形民俗文化財にもなっている筏の一本乗りも行われる。30人余りの筏師が自らの腕を競うこのイベントは、名古屋港開港以来、木材を多く扱ってきたこの港に長く伝えられている独特な技術だ。夜にはガーデン埠頭に、港区内から8台の山車がくりだし、市民総出の民謡踊り大会でにぎわっている。



投げ松明^{たいまつ}

斉藤 千晃 (人文学部1年)

私の町で伝統芸能と呼べるものは、雁祭りで行われる投げ松明というものだ。

雁祭りとは、日本三大流富士川の流れを静めた人に感謝を、又水神を奉る為に8月～10月に行われる祭りだ。その中でも投げ松明という行事は祭りの見所である。長さ10メートル、15メートル、18メートルの柱の最端にある器に向かって火のついた木を投げ、器に火をつけ燃やすというものであるが、それを見に10万人は集まる。火が付いた時の歓声もすごいものだが、器が落ち、火が大きくなる時の人々の歓声はそれを何倍をも上まわっている。中学生になれば参加ができるようになり、一般の人も参加できる。

最近では、祭りに参加する地域も増え、ますます盛り上がりつつある。最後には打ち上げ花火を上げるなど、華やかにもなった。そんな風に、楽しくなってきたのも、長く続いてきたのも、地域住民の協力と、祭りに対する意識が強いからである。これからも祭りを続けていく為に、地域での協力が必要なのだと改めて思った。

みそぎ祭り

矢野 陽平 (人文学部1年)

岐阜市の象徴、長良川。寒さもひとしおの12月10日、この清流にふんどし姿で飛び込む祭りがある。長良川にかかる忠節橋の北、岐阜市池の上にある葛懸神社の祭礼で、その名は「みそぎ祭り」。

この祭り、以前は旧暦10月(神無月)の最後の日に行われていた。というのも、長良川で身を清めるのは、出雲から戻る神を迎えることにあるからで、事実、みそぎ祭りに続いて深夜零時から神官によって厳粛に「神迎え祭り」が行われる。

知立市まつり

市川 祐衣 (人文学部2年)

愛知県知立市で行われる知立まつりは毎年5月3日に本祭りあいまつと間祭りが交互に行われます。知立まつりの記録は1645年から残っており、今のまつりは山車がメインとなっていますが、江戸時代にはからくりや操り人形、今様の踊りなどが行われていたようです。知立山車とからくりは国の重要無形民俗文化財になっています。

知立山車は市内5町から奉納されています。山車を引くまつり囃子も5町がそれぞれ町ぐるみで代々引き継いでいきます。曲は町ごとに多少違いはありますが、3種類に分かれています。5町から奉納されている山車は江戸時代から修理・改良を繰り返されて、立派なものになっています。

からくりは浄瑠璃と三味線に合わせて山車の二階で上演される糸からくり(山車からくり)で、これも江戸時代から町の人たちによって考案されてきました。一の谷の合戦という演目が今は本祭りで1町が行っています。

能田徳若万才

西山 薫 (人文学部1年)

私が住んでいる西春日井郡師勝町には、能田徳若万才という伝統芸能がある。この芸能は、尾張地方に伝承される初春の祝福芸の一つで、他に類型が少ない郷土芸能史上重要なものとなっている。

鎌倉時代、木賀崎(名古屋市東区矢田町)長母寺の名僧・道暁(無住国師)に味鏡村(名古屋市北区楠町)の阿部朝臣有任の次男・徳若らが陰陽の道を学ぶかわら、「万才歌」を教わったのが「徳若万才」の起源とされている。

徳若は万才一派を形成し、弟子の石田新左エ門(初代元太夫)へ、さらに、海部郡方領村(甚目寺町)の桂五郎(二代目)へと伝承され、この桂五郎に今から110年ほど前に、能田(師勝町にある地名)の長瀬幸右エ門(三代目)ほか4人の人々が学んだのが「能田徳若万才」の始まりである。この長瀬幸右エ門から長瀬要七(四代目)らに伝えられ、現在に至っている。

曲目には、院経五穀の舞、さっかい踊り、七福神ばやし、お茶ばやしなどがある。中央には太夫、左右に才蔵が3人ずつの合計7人で演じる。

なお、この伝統芸能は、昭和47年に無形文化財として、町から指定されており能田徳若万才保存会によって伝承されている。



知立市まつり 写真提供：ホームページ・尾張の山車まつり (NOVA)

日本の伝統芸能

図書館には伝統芸能に関する本や視聴覚資料がたくさんあります。
その中から今回は日本の伝統芸能に関する視聴覚資料(ビデオ・DVD)をご紹介します。

音と映像による
日本古典芸能大系(全25巻)
日本ビクター

歌舞伎や能・狂言はもちろん神事芸能や仏教芸能まで幅広く紹介されています。



枝雀：落語大全
(第1期全10巻) 東芝EMI

1999年に亡くなった落語家
桂枝雀のビデオ未収録演目を
集めた落語大全です。



大系日本歴史と芸能：
音と映像と文字による
(全14巻) 日本ビクター・平凡社

神楽や盆踊りなど宗教にかかわりの深いものを主に紹介されており、附属資料の冊子も充実しています。



ふるさとの祭りと芸能
(全24巻) NHK

日本全国に伝わる四季折々の
伝統芸能を網羅しています。
各巻ごとに問合せ先も表記されており、研究に役立ちます。



雅楽：重要無形文化財
(全10巻) 下中記念財団

東遊・久米舞・催馬楽ほか雅楽器や雅楽譜、装束などの巻もあります。



歌舞伎の魅力：
岩波ビデオテーク(全25巻)

岩波書店
勸進帳などの作品のほか、舞台や音楽を中心にした巻もあります。



家伝：美の継承者たち(全4巻)
NHK

能・茶道・香道・華道それぞれの家元がその道の真髄や歴史について語っています。



能・狂言入門：岩波ビデオテーク
(全2巻) 岩波書店

能は「隅田川」という作品を通して、また狂言は「太郎冠者の日々」と題して「太郎冠者」を中心に、それぞれ能と狂言の持ついろいろな特質を紹介しています。



野村万作・萬斎『狂言でござる』
(全4巻) 角川書店(DVD)

狂言師 野村万作が選んだ十三の演目が高画質のデジタル映像で収められています。字幕スーパーもついています。



上記のビデオとDVDはすべて名古屋キャンパス図書館で所蔵しています。

映画展開催のお知らせ

名古屋キャンパス、三好キャンパスともに10月より映画展を開催します。

名古屋キャンパスでは「映画のパンフレット展(仮)」と題しまして、新旧の邦画や洋画のパンフレットをたくさん展示いたします。パンフレットを読むと知らなかった裏話や場面場面の隠された意味などわかって、おもしろい発見があるものです。例えば『マトリックス』で、その衣装を通して救世主ネオ＝「キリスト」、ネオを仮想現実空間に導いたモーフィアス＝「洗礼者ヨハネ」、ネオが愛し守る存在トリニティー＝「キリスト教」といった構図を読み解く、などという文章を読むと「なるほど」とか「やっぱりね」などと思ってもう一度見てみたくなったりしませんか。

また、三好キャンパスでは「読む映画展」と題して映画のビデオやDVDとともに原作本やノベライズを展示いたします。映像で見るのとはまた違うイメージを味わったり、映画ではカットされてしまった場面や台詞を楽しんだりしてみてください。原作を読んでから映画を見るか、映画を見てから原作を読むかで作品に対する印象はかなり変わると思いませんか。読んでから見るか、見てから読むか。大きな問題ですね。私は話題の「ハリー Potter とアズカバンの囚人」を、原作を

読まずに見て「おもしろいけど、なんだかドラえもんみたいな話だ (=どんな困った事態にも便利なアイテムが登場して助かる)」くらいにしか思わなかったのですが、原作を読んでから見た人によると「あの伏線がないとあの部分の意味がわからないのに」という場面がたくさんあるそうで、「あそこはこういう意味だったんだよ」という解説を聞いて「へー、なるほど」と思ったりしました。原作を読んでからもう一度見てみたら今度はどんな風を感じるのか、自分でも楽しみです。

それぞれのキャンパスで工夫を凝らして展示しますので、お楽しみに。時間があれば自分のキャンパスだけでなく、三好の人は名古屋へ名古屋の人は三好へ見に行ってみてくださいね。

下線部『マトリックス
レボリューションズ』
パンフレットより抜粋



●●●● 新しい雑誌が入りました ●●●●

名古屋キャンパス

雑誌名	出版社
週刊福祉新聞	(株)福祉新聞社
臨牀透析	日本メディカルセンター
Diabetes Frontier	メディカルレビュー社
情報の科学と技術	情報科学技術協会
スポーツメディスン	ブックハウス・エイチディ
SAPIO	小学館
社会福祉研究	鉄道弘済会社会福祉部
ソーシャルワーク研究	相川書房
総合社会福祉研究	総合社会福祉研究所
週刊社会保障	社会保険法規研究会
地域福祉研究	日本生済会社会事業局
みんなのねがい	全国障害者問題研究会
リハビリテーション研究	日本障害者リハビリテーション協会
AGING	中央法規出版
児童養護	全国社会福祉協議会養護施設協議会
子どものしあわせ	草土文化
週刊中国語世界	日中通信社
CHAI	中文産業

三好キャンパス

雑誌名	出版社
教員養成セミナー	時事通信社
教職課程	協同出版
公務員試験 受験ジャーナル	実務教育出版
就職ジャーナル	日本リクルートセンター
週刊朝日百科 仏教を歩く	朝日新聞社
旬刊商事法務	商事法務研究会
新聞ダイジェスト	総合出版社
Business research	企業研究会



2号続けてお届けした「伝統芸能」特集いかがでしたか？
これからも色々なテーマを取りあげていきたいと思っておりますので、お楽しみに。